

心理教育的授業の実践可能性についての検討

—小中学校教師への紹介授業と体験の感想から—

How to practice Psychoeducation in the school?

○鈴木善和・曾山いづみ・山本渉

○Suzuki Yoshikazu · Soyama Izumi · Yamamoto Wataru

東京大学大学院教育学研究科

The University of TOKYO Graduate School of Education

Key words : psychoeducation, school, assertion-training

問題と目的

学校現場における心理職（スクールカウンセラー：以下SC）の浸透にともない、心理教育や教師への研修など、多数に関わることができる実践への注目が集まっている。しかし学校現場での心理教育の実施には、時間確保の難しさ、SC側の技能、教師の理解など、様々な課題がある。そこで本研究では、小中学校教師に心理教育的授業を体験してもらい、教師がそれをどのように受け止めるのか、学校現場での実践可能性についてどのように考えるのかについて検討することを目的とした。

心理教育的授業としては、コミュニケーションに関する取り組みが強く求められている（文部科学省,2011）こともあり、コミュニケーション力醸成のためのトレーニングで、ある程度方法論が確立しているアサーショントレーニング（以下AT）を取り上げることとした。

方法

対象者：A区の小中学校教師55名を対象とした。

紹介授業：ATを専門とする臨床心理士が約2時間の紹介授業を行った。内容は①アサーション概念について②コミュニケーションの3つのタイプ（ワークと講義）③実践のゲーム④質疑応答であった。

データ収集方法：紹介授業に参加していた教師55名に質問紙を配布し、35名分を回収した。

質問紙内容：1) ATについてと2) 実践可能性について5段階尺度と自由記述の形式で尋ねた。

分析方法：5段階尺度については統計的手法で処理し、自由記述はKJ法を援用して分類を行った。

結果と考察

1) ATについて

紹介授業までATについてあまり知らなかったという人が多かった。また、紹介授業を受けた後では、全体的にATへの興味関心が高まっていた。（ATについて「あまり知らなかった」「ほとんど知らなかった」合わせて71%。

「1. とても興味があった（かなり興味をもった）」～「5. ほとんど興味がなかった（ほとんど興味をもたなかつ

た）」の5段階尺度に対して、紹介授業前にATに興味があったかの問いに対する回答の平均値は2.7、授業後に興味をもったかの問いに対する回答の平均値は1.9であり、これらの回答の間には統計的に有意な差が見られた）印象に残っている内容は、①アサーションの定義に関するもの、②コミュニケーションのタイプ、③実際のゲームの大きく3つであった。②について、実際のやり取りが想像できた、自分のコミュニケーションスタイルを振り返って考えられたとの声があった。また、「アサーションは万能ではない」ことを知ることができてよかった」と留意点が印象に残ったとの声もあった。

2) 実践可能性について

ATを実践したいと思えるかという問いに対しては、「ぜひ実践したい」「少し実践したい」に○をつけた人が多かった（ATを「ぜひ実践したい」「少し実践したい」合わせて66%）。同時に回答の理由について訊ねると、その回答は①具体的な実践例・方法がわからない、自分のスキルが足りないなど、【より深い理解を求める】、②発達段階や攻撃性の高い子の存在などのため、【子ども間で実践することに難しさを感じる】、③時間不足など【物理的難しさを感じる】、④ゲーム等、【取り入れられそうなところから取り入れる】の大きく4つに分類された。実践にあたり行ってほしいサポートとして、①具体的な実践例や授業計画の紹介、②研修を重ねる、③SCや専門家からのサポートが挙げられ、具体的な実践例やアレンジ方法についての知識を得ていくことが、実践にあたって必要不可欠と考えられた。

授業全体の感想では、「まずは知ることができてよかった」「これから研修を積んでいきたい」「より多くの実践例を知りたい」など、紹介授業をきっかけにATへの実践に向けて動いてみたいという声が多くある一方で、「学校教育には守るべき価値観がある」「ぶつかり合うのも人間」という否定的な意見も見られた。ATをただ紹介するだけでなく、どのようにしたら学校現場や教師になじみやすい形とできるか、実践に向けての計画や、導入しやすいポイントなど、教師と心理職が相互に細やかなやりとりをしていくことが必要だと考えられた。